［論説］

大学生向けの英語資格試験についての概要と考察
ー特に医薬系学生の英語力向上のためにー

菅　原　美　佳

はじめに

一般に、我々日本人の英語力は、大学受験期をピークとして、その後の使用・学習頻度の減少に伴い、徐々に低下していくと言われている。大学生が英語学習のモチベーションを維持したり、海外留学を目指したり、就職先で即戦力となる英語力を身につけようとしたりする上で、各種英語資格試験を利用することは効果的である。

英語力を測る試験は数多く存在するが、本稿では、大学生に役立つものに絞って、その特徴を整理・比較しながら概観していく。また、特に筆者が講義を担当する医学部・薬学部の学生にとって、将来、医療現場に出たときに求められる英語力についての調査結果を概観しながら、そのような英語力を習得するのに役立つ英語資格試験についても述べていきたい。

１節では、一般的な大学生向けの英語資格試験５つを取り上げ、それぞれの内容や特徴、難易度等を概観する。２節では、特に医薬系の学生が将来、職場で必要となる英語スキルについて考察した後、それらを学ぶのに適した２つの英語資格試験について紹介する。３節はまとめである。

１．大学生向けの英語資格試験について

本節では、学習のモチベーション維持に役立ち、かつ就職や留学等に活用できるといった点で、特に大学生に適すると考えられる試験５つに絞って概観する。

１．１．CEFR

５つの試験について見る前に、本節ではまず、CEFRについて述べる。各資格試験には、それぞれ独自の出題形式や採点基準などがあるため、異なる試験のスコア同士を単純に比較して議論することはできない。そのため本稿では、ヨーロッパにおける外国語学習者のレベルを示す国際指標であるCEFR（セファール、Common European Framework of Reference for Languages、ヨーロッパ言語共通参照枠）を使いながら比較していくことにする。CEFRとは、2001年に欧州評議会が発表した、語学力（英語に限らない）のレベルを示す国際標準規格である。

表１　CEFRによる６段階の語学レベル

Proficient user（熟練した言語使用者）	C2	聞いたり読んだりした、ほぼ全てのものを容易に理解することができる。いろいろな話し言葉や書き言葉から得た情報をまとめ、根拠も論点も一貫した方法で再構築できる。自然に、流暢かつ正確に自己表現ができる。
	C1	いろいろな種類の高度な内容のかなり長い文章を理解して、含意を把握できる。言葉を探しているという印象を与えずに、流暢に、また自然に自己表現ができる。社会生活を営むため、また学問上や職業上の目的で、言葉を柔軟かつ効果的に用いることができる。複雑な話題について明確で、しっかりとした構成の、詳細な文章を作ることができる。
Independent user（自立した言語使用者）	B2	自分の専門分野の技術的な議論も含めて、抽象的な話題でも具体的な話題でも、複雑な文章の主要な内容を理解できる。母語話者とはお互いに緊張しないで普通にやり取りができるくらい流暢かつ自然である。幅広い話題について明確で詳細な文章を作ることができる。
	B1	仕事、学校、娯楽などで普段出会うような身近な話題について、標準的な話し方であれば、主要な点を理解できる。その言葉が話されている地域にいるときに起こりそうな、たいていの事態に対処することができる。身近な話題や個人的に関心のある話題について、筋の通った簡単な文章を作ることができる。
Basic user（基礎段階の言語使用者）	A2	ごく基本的な個人情報や家族情報、買い物、地元の地理、仕事など、直接的関係がある領域に関しては、文やよく使われる表現が理解できる。簡単で日常的な範囲なら、身近で日常の事柄について、単純で直接的な情報交換に応じることができる。
	A1	具体的な欲求を満足させるための、よく使われる日常的表現と基本的な言い回しは理解し、用いることができる。自分や他人を紹介することができ、住んでいるところや、誰と知り合いであるか、持ち物などの個人的情報について、質問をしたり、答えたりすることができる。もし、相手がゆっくり、はっきりと話して、助けが得られるならば、簡単なやり取りをすることができる。

（参考資料［１］）

表１のA1からC2までの記号が、語学力のレベルを示している。A1やA2は初級、B1、B2は中級、C1、C2は上級と言っても良い。履歴書等に書い

て自分の語学力をアピールできるかどうかは、一般的にはB1以上が目安となるとされている。以下では、各英語資格試験の難易度の目安として、このCEFRの記号を用いながら見ていく。

1．2．実用英語技能検定（英検）

まずは、国内では認知度も受験者数も最大級と言われる、実用英語技能検定（いわゆる「英検」）について概観する。これは、英語のコミュニケーションにおいて欠かせない「読む」・「聴く」・「話す」・「書く」という4技能の能力を測定することを目的として、日本英語検定協会が1963年から実施している試験である。

表２　英検の各級の概要

級	レベル	CEFR	試験の構成	S-CBT受検
1級	大学上級程度	B2, C1	・一次試験（リーディング・ライティング・リスニング 計135分） ・二次試験（スピーキング約10分）	不可
準1級	大学中級程度	B1, B2	・一次試験（リーディング・ライティング・リスニング 計120分） ・二次試験（スピーキング約8分）	可
2級	高校卒業程度	A2, B1	・一次試験（リーディング・ライティング・リスニング 計110分） ・二次試験（スピーキング約7分）	可
準2級	高校中級程度	A1, A2	・一次試験（リーディング・ライティング・リスニング 計100分） ・二次試験（スピーキング約6分）	可
3級	中学卒業程度	A1	・一次試験（リーディング・ライティング・リスニング 計75分） ・二次試験（スピーキング約5分）	可
4級	中学中級程度		・リーディング・リスニング 計65分 ・二次試験なし	不可
5級	中学初級程度		・リーディング・リスニング 計45分 ・二次試験なし	不可

（参考資料［１］、［３］）

レベルは、表２のように、５級から１級までの７段階に分けられている。３級以上は二次試験までである。なお、2023年９月の日本英語検定協会の発表によると、準２級と２級とのレベルの乖離が大きいという受験者からの意見を反映して、準２級と２級の間に「準２級プラス」という級が2025年に新設される予定である。

表２中の「S-CBT」というのは、2020年に導入された新方式であり、紙媒体で行う従来型の試験と違って、試験会場の「パソコン」を用いてインターネット経由で行うタイプの英検である。問題形式や難易度、採点方式、合格証明書等は従来型と同じである。従来型の英検は１年に３回のみ実施されるのに対して、英検S-CBTは、毎週末、実施されており、４か月単位の各期間内で２回を上限として、自分の好きな時に受験することができる。二次試験も合わせると２日間にわたって行われる従来型の試験と異なり、４技能が一日で測れるという利便性もある。また、従来型とS-CBTの併願も可能である。

日本英語検定協会によると、2022年度の全国の大学生の英検受検者数は、従来型試験とS-CBT型試験を合わせて54,624人である（参考資料［２］）。大学生が英検に挑戦するとしたら、１級は非常に難易度が高いことから、２級か準１級を受検する人が多いであろう。一般的には、CEFRで言うとB1に相当する２級や準１級を取得していれば履歴書に書けるとされているが、企業や部署によって求められるレベルは異なる。通常の業務で英語を用いる職場では、最低でもCEFRでB1およびB2に相当する準１級は取得しておきたい。

また、英検は、合格証明書に有効期限がないため、大学１年生など早い時期に取得しても、数年後の就職に生かすことができるという利点がある。[1]

[1] 1.4、1.5節で紹介する試験には、２年程度の有効期限がある。

１．３．TOEIC

TOEIC（トーイック、Test of English for International Communication）は、アメリカのETS（教育試験サービス）が開発し、日本では一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会が1979年から実施している試験である。英検の受験結果が「合否」という形で出るのに対し、このTOEICの受検結果は、「スコア」で出るという特徴がある。またTOEICは、厳密にはTOEIC L&R（リスニング＆リーディング）とTOEIC S&W （スピーキング&ライティング）の２種類がある。ただしTOEIC公式データ（参考資料［４］）によると、2022年度において、TOEIC L&R受検者が970,000人であるのに対して、TOEIC S&Wの受検者は12,100人と極端に少ない。このため本稿では、TOEIC L&Rに絞って見ていく。

TOEIC L&Rは、約45分間・100問のリスニング問題と、75分間・100問のリーディング問題から構成される、マークシート方式のテストである。満点は、リスニングとリーディング合わせて990点である。TOEICのスコアのレベルの目安を表３に示す。

表３　TOEICスコアのレベルの目安

	TOEIC L&Rスコア（990点満点）	CEFR
Proficient user	945～	C1
Independent user	785～	B2
	550～	B1
Basic user	225～	A2
	120～	A1

（参考資料［５］）

では、大学生は、どのぐらいのスコアを取得することを目標に学習すれば良いのであろうか。TOEICによる公式調査結果（参考資料［７］）によると、企業が新入社員に期待するTOEIC L&Rのスコアは「425～645点」というデータがある。では、本当に425点以上を目指すだけで良いのであ

ろうか。ここで、同じくTOEICが公表している、2022年度の学部別の大学生の平均点を、次の表4にまとめる。

表4　大学生の学部別TOEIC平均スコア

学部	2022年度平均スコア（990点満点）
保健・医療系学部	589点
科学系学部（農学、コンピュータ科学、数学、物理学、統計学等）	565点
工学・建築系学部	543点
人文系学部（教育、美術、言語、文学、音楽、心理学等）	601点
社会・法学系学部（国際、法律、政治、社会学）	614点
経済系学部（会計学、ビジネス、経済学、財政学、マーケティング、貿易等）	597点

（参考資料［６］）

表4を見ると、理系では543～589点、文系では597～614点という数字が出ており、いずれにしても、上述の「425点」ではほとんど自己アピール材料にならない可能性がある。英語を武器にしたいのであれば、600点は最低ラインとして、できれば700～800点台を目指したい。

ただし、注意点もある。TOEICのスコアには、英検同様に有効期限はないが、実際は、企業や学校等が「２年以内に取得したもの」というような独自の条件を求めてくるケースもあるため、確認が必要である。また、TOEICは日本国内では非常に知名度が高く、採用している企業が多いため、国内で就職を考えている場合は有益であるが、海外においては、TOEICが通用するかどうかはケースバイケースである。特に、海外への留学や赴任を考えている場合は、1.4～1.6節で紹介する試験の方が適していると思われる。

１．４．TOEFL

TOEFL（トフル、トーフル、Test of English as a Foreign Language）は、TOEICと同じく、アメリカのETSが開発している試験である。TOEICが日常生活やビジネスにおける英語力を問う試験であるのに対し、このTOEFLは、大学等のアカデミックな場で必要とされる英語力を試すことを目的とした試験であり、特に、アメリカ、イギリス、カナダ、オセアニア、アイルランド、アジア（の一部）の大学へ留学する際に、スコアが入学審査に用いられるという特徴がある。

試験は「iBT」（Internet-Based Testing）という、試験会場のパソコンを使って受検する形式で行われ、リーディング、リスニング、スピーキング、ライティングの４技能が試される。どの問題も、大学の講義やキャンパス内で想定される場面を題材としたものが中心である。例えばリーディングは、教養科目の講義で扱われるようなアカデミックな文章についての読解問題であり、リスニングとスピーキングも、学生同士や、教職員と学生との会話等、キャンパス内で想定される場面や会話についての問いに答える（スピーキングはマイクに答えを吹き込む）。ライティングは、アカデミックな内容を自分で作文してキーボードでタイピングする。リーディングとリスニングはコンピュータが採点するが、ライティングとスピーキングは、人間の採点官とAIの両方によって採点が行われる。

試験時間は、従来は約３時間かかったが、2023年７月より、TOEICと同様の約２時間に短縮されたために、受検の負担が少なくなった。

TOEFLのスコアのレベルの目安を、表５に示す。満点は120点であり、TOEFL公式資料（参考資料［８］）によると、2022年度の日本人受検者の平均スコアは73点である。

表５

TOEFL iBT スコア（120 点満点）	CEFR
114～120	C2
95～113	C1
72～94	B2
42～71	B1
0～41	n/a （該当なし）

（参考資料［９］）

表５を見ると、41 点以下にはCEFRの表記がされていない。このことから、受検者にはそもそも中級以上（CEFRでB1以上）のレベルが求められると考えられるため、初級レベルの人が受検する場合には、相当な量の勉強をしてから臨む必要があるであろう。

留学する際は、例えばアメリカのスタンフォード大学は89点、イギリスのオックスフォード大学は100点など、各大学ごとに最低基準が定められている。英語圏の国への留学を視野に入れている学生にとっては、ぜひ受けておきたい試験である

就職については、日本のビジネス界においてはTOEFLよりもTOEICの方が重視されているというのが現状だが、英語を用いる企業や部署においては、TOEFLが有利に働くこともある。

ただし、スコアの有効期限は、TOEFL公式サイトに「テスト日から２年間」と明記されているため、留学や就職等でスコアを提出する際には注意が必要である。

１．５．IELTS

IELTS（アイエルツ、International English Language Testing System）も、海外へ留学する際に英語力の証明となる試験である。イギリスのブリティッシュ・カウンシルとケンブリッジ大学英語検定機構、およびオーストラ

リアのIDPが共同運営していることから、IELTSは、アメリカというよりは、イギリスやオーストラリア等へ行く際に適していると言われている（アメリカの場合は、IELTSではなくTOEFLの方を受験するのが一般的である）。この試験は、日本では日本英語検定協会が実施・運営を担当している。

試験は、英語圏の大学への留学を希望する人向けの「アカデミック・モジュール」と、イギリス、カナダ、オーストラリア等へ移住申請をする人向けの「ジェネラル・トレーニング・モジュール」との、二つのタイプに分けられる。いずれのモジュールも、リーディング、ライティング、リスニング、スピーキングの4技能が試される。試験時間は約2時間45分である。試験の結果は、合否ではなく、1.0から9.0までの0.5刻みのバンドスコアで表記される。IELTS公式資料によると、各スコアのレベルは概ね、表6の通りである。因みに、日本人の2019年のアカデミック・モジュールの平均バンドスコアは、5.8である。

表6　IELTSバンドスコア

スコア		CEFR	
9	Expert user	C2	英語を自由自在に使いこなす能力を有する。
8	Very good user	C1, C2	不正確さや不適切さがみられるが、英語を自由自在にこなす能力を有している。
7	Good user	C1	不正確さや不適切さがみられ、また状況によっては誤解が生ずる可能性もあるが、英語を使いこなす能力を有する。
6	Competent user	B2	不正確さ、不適切さ、誤解も見られるが、概ね効果的に英語を使いこなす能力を有する。
5	Modest user	B1, B2	不完全だが英語を使う能力を有しており、ほとんどの状況でおおまかな意味を把握することができる。
4	Limited user	B1	慣れた状況においてのみ、基本的能力を発揮できる。
3	Extremely Limited user		非常に慣れた状況において、一般的な意味のみを伝え、理解することができる。
2	Intermittent user		慣れた状況下で、その場の必要性に対処するため、極めて基本的な情報を片言で伝える以外、現実的なコミュニケーションを取ることは不可能。
1	Non user		単語の羅列のみで、基本的に英語を使用する能力を有していない。

（参考資料［１］、［11］）

受検者は、紙媒体の試験とコンピュータによる試験とを選ぶことができ、前者は全国の主要16都市で、後者は東京・名古屋・大阪でのみ受検できる。コンピュータ方式の場合であっても、スピーキングは試験官との対面の面接試験である。

IELTSは、世界約140カ国の機関によって認定されており、イギリス、オーストラリア、カナダ、ニュージーランドであれば、ほぼ全ての大学において活用することができる。アメリカは、全ての大学ではないが、それでも TOEFLに代わる英語の試験として採用する大学は3,400を超えている。

また、TOEICやTOEFLほど知名度が高いとは言えないが、日本国内で就職する際も、IELTSは役立つ。特に、電話やメール、会議等で英語を用いる部署や、ヨーロッパ等の外資系企業へ就職する際などに、IELTSのスコアを取得しておくと、自分の即戦力の客観的な証明となる。

ただし、ブリティッシュ・カウンシルの公式ホームページによると、2年以上経過したスコアは有効とは認められないため、注意が必要である。

1.6. ケンブリッジ英語検定

最後に、IELTSと同じくイギリスのケンブリッジ大学英語検定機構が運営している試験である、ケンブリッジ英語検定について概観する。日本では、同検定機構と河合塾によって共同運営されている。2023年現在、全国9都市に試験会場があり、リーディング、リスニング、ライティング、スピーキングの4技能が試される。このうちスピーキング試験は、受検者2名と試験官2名とで対面で行われる。レベルは次の表7のように分けられており、取得したスコアによって、その受検者にふさわしいレベルが認定される。

表７　ケンブリッジ英語検定のレベル

レベル	CEFR
Proficiency	C2
Advanced	C1
First	B2
Preliminary	B1
Key	A2

（参考資料[13]）

海外では130カ国、25,000以上の機関がケンブリッジ英語検定を採用しており、その情報はホームページで随時更新されている（参考資料［14]）。スタンフォード大学やシドニー大学、キングス・カレッジ・ロンドンなどがその例である。

この試験も、IELTSと同様、日本国内での知名度はTOEIC等と比べるとあまり高くないため、国内の全ての就職で役立つとは限らないが、外資系企業への就職等、英語を武器に働きたいのであれば大きな強みになる。CEFRで言うとB2に相当する「First」レベルが認定されれば、日常的に英語を使って仕事をする能力の証明になるであろう。

ケンブリッジ英語検定は、TOEFLやIELTSと違い、成績に有効期限がないため、一度認定されたレベルは、英語力の証明として、長く使うことができる。

１．７．大学生向けの英語資格試験 まとめ

ここまで、一般的な大学生向けの英語資格試験として、英検、TOEIC、TOEFL、IELTS、ケンブリッジ英語検定という５つの試験について概観してきた。それぞれ特徴に違いがあるため、自分の目的に応じて選び、活用していくと良いと考える。

例えば、就職の際に履歴書に書くという目的で受検するのであれば、日本国内で認知度や汎用性が高く、級認定やスコアに有効期限がないという

意味では、英検やTOEIC等が使いやすいと思われる。英検は、国内ではどんな世代においても認知度で群を抜いている。また、合否がはっきりと出るため、目標とする級に合格できた際の達成感は格別であり、自信やその後のモチベーションにもつながるであろう。また、従来型の紙の試験に加えて、パソコンで受検する方式も出来たため、自分が得意な方で受験できるという良さもある。そしてTOEICは、合否ではなくスコアが出る方式だが、自分の成長具合を具体的に点数で確認することができ、受検するたびに目標設定を上げていくことで、モチベーションを維持していくことができる。昨今は日本のビジネスにおけるTOEICの活用度が高くなってきているため、英語を武器にしたいのであれば、大学生のうちにTOEICで600～800点程度を取得しておくことは必須と言えるかもしれない。また、英語を日常的に用いる部署や外資系企業等の場合は、ケンブリッジ英語検定も良いであろう。

TOEFLは、日本国内でも知名度が高く、もちろん就職の際に履歴書に書けるが、日本のビジネスにおいてはTOEICほどは重視されていない傾向がある。そして、1.4節で述べたように、TOEFLは受検者に求められるレベルが高いため、高スコアを取得する自信があまりない場合はTOEICの方が有益であると思われる。

また、海外へ行くことを目的に受検するのであれば、成績に有効期限がないという点では、留学先が採用していればケンブリッジ英語検定が使いやすいであろう。アメリカやヨーロッパ等のほとんどの大学で使えるという点では、TOEFLやIELTSが安心である。一般的には、TOEFLはアメリカに強く、IELTSはイギリスやオーストラリアに強い（イギリス等でビザ申請をする際にはIELTSのスコアがあると有利である）と言われているが、そのほかの違いとしては、出題内容がTOEFLの方はアカデミックな英語に特化しているということや、スピーキング試験が、TOEFLではマイクへの

吹き込みだがIELTSでは面接官と対面で話すということなどが挙げられる。[2]

２．医薬系大学生向けの英語資格試験について

前節では、学部の区別なく、一般的な大学生向けの英語の資格試験について考察したが、本節では、特に筆者が講義を担当している医学部と薬学部の学生にとって役立つと思われる、医療に特化した２つの英語の試験について述べる。

だがその前に、彼らが将来、専門性を生かして医療職に就いた際、どのような英語の技能をどの程度使う必要性があるのかを知るため、三好他（2009）および大野他（2019）のデータを概観する。また、そのデータをもとに、医療業務で役立つ英語を習得する上で活用できそうな資格試験について、改めて考察する。

２.１．医師と薬剤師の英語使用の実態について

三好他（2009:45-52）は、医師と薬剤師それぞれにおいての、職場での英語の使用頻度について2008年に実施した調査の結果を報告している。これを便宜上、まとめると、次の表８、９のようになる。

---

[2] １節で紹介したほかに、大学生が受験しやすい試験の一つに、株式会社ベネッセコーポレーションによる「GTEC」がある。これは、企業によっては海外赴任者の選考等に用いられることもあるが、ビジネス界では、他の試験と比べて知名度が低いことや、海外で使える場所も限られている（2023年現在、302校）ことから、本稿では扱わない。また、日本国際連合協会による「国連英検」も大学生が受検可能であるが、これは主に国連やJICA等に勤務する場合や外交官を目指す場合等、特殊性のある試験であるため、これも本稿では扱わない。

表８　医師の、場面別の英語の使用頻度（単位：人数）

	大いにある	ある	多少ある	ない	合計
患者と話す	8	11	79	42	140
同僚や研究者と話す	9	18	47	66	140
学会で発表を聞く	25	36	67	12	140
学会で発表する	18	24	60	38	140
論文や医療情報を読む	75	44	21	0	140
論文や医療情報を書く	27	44	46	23	140

（参考資料[15]）

表９　薬剤師の、場面別の英語の使用頻度（単位：人数）

	大いにある	ある	多少ある	ない	合計
患者と話す	5	4	22	7	38
同僚や研究者と話す	1	3	11	23	38
学会で発表を聞く	4	8	17	9	38
学会で発表する	0	5	11	22	38
論文や医療情報を読む	10	16	12	0	38
論文や医療情報を書く	3	5	11	19	38

（参考資料[15]）

表８、９によると、医師、薬剤師ともに、英語の使用頻度において「大いにある」「ある」「多少ある」の合計が最も多い場面は、論文や医療情報などを「読む」、つまり「リーディング」であることがわかる。

次に、大野他（2019）では、同じ薬剤師でも、病院薬剤師と薬局薬剤師とで、やや英語の使用実態が異なるという興味深いデータを提示している。同著では、2017年に現役の病院薬剤師120名と薬局薬剤師120名を対象とし

て行ったアンケート調査結果が報告されている。それによると、英語の4技能（リーディング、リスニング、ライティング、スピーキング）それぞれの使用頻度についての調査結果をまとめると、次の表10のようになる。[3]

表10　病院薬剤師と薬局薬剤師それぞれにおける、英語の4技能の使用頻度（単位：人数）

		毎日使う	週に数回使う	月に数回使う	年に数回使う	ほとんど使わない	合計
リーディング	病院	20	28	34	23	15	120
	薬局	5	13	27	37	38	120
ライティング	病院	0	7	21	35	57	120
	薬局	2	5	11	38	64	120
リスニング	病院	1	7	22	45	45	120
	薬局	1	5	31	50	33	120
スピーキング	病院	2	6	14	44	54	120
	薬局	1	7	25	50	37	120

（参考資料[16]）

このデータをもとに、大野（2019:10）は、薬剤師が最も頻繁に使用する英語スキルは「リーディング」であると結論付けている。この結果は、上で紹介した三好他（2009）の表9の結果とも整合するものである。「リーディング」とは、ここでは、院内・社内文書、契約書、薬の添付書、英字新聞、雑誌、専門誌、論文、手紙、電子メール、ホームページ閲覧・検索等で使う技能のことを指す。

そして、病院薬剤師と薬局薬剤師に分けた分析においては、院内・社内文書、契約書、専門誌、論文のリーディングにおいて、薬局薬剤師よりも病院薬剤師の方が使用頻度が高いことが示されている（大野2019:6）。

また、リーディング以外の技能についても見てみると、例えばライティングにおいては「論文執筆」、リスニングにおいては「講演」と「プレゼンテーション」、スピーキングにおいては「プレゼンテーション」におい

[3] 大野（2019:4）のデータはそのままに、便宜上、筆者が表にまとめた。

て、病院薬剤師の英語の使用頻度が高いと同著では示されている。因みに、有意差というほどの差は見られないが、薬局薬剤師が病院薬剤師に比べて比較的、英語力を使用する頻度が高く、かつ自身で英語力が必要だと感じている場面は、薬の添付文書（ライティング）、電話・商談（リスニング）、職場内コミュニケーション・電話・テレビ会議・商談・患者対応（スピーキング）という結果も出ている（大野2019:6-7）。

本節で扱った先行研究データから明らかになったこととしては、医師、薬剤師ともに、読む・聞く・書く・話すという英語の4技能は、いずれもある程度は使う可能性があるため、英語は学習し続けていかなければならないということである。医師や薬剤師は、医療人である以上、外国人患者と話す機会があるため、リスニング力やスピーキング力はもちろんあった方が良い。だがそれだけではなく、特に医師や病院薬剤師は、各種文書や論文を英語で読んだり書いたりする機会が多いため、リーディング力やライティング力も学生のうちに習得しておいた方が良いと言えるだろう。

次の2.2節および2.3節では、医療英語を身につける上で役立つ二つの検定試験について概観する。なお二つとも、CEFRによる難易度の標記はされていない。

２.２．医学英語検定試験

日本医学英語検定試験（以下、「医英検」と略す）とは、日本医学英語教育学会が2008年から実施している、医療や医学に特化した英語の試験である。[4]　年に１回、全国８都市に試験会場が設けられている。同学会の公式ホームページによると、この「医英検」は、医療系学生や医療従事者、教育、出版、翻訳、通訳等に従事する人など、多様な受検者層が想定され

[4]「医英検」は、いわゆる「英検」とは名称は似ているが全く異なる試験である。

ている。レベルは、基礎級、応用級、プロフェッショナル級、エキスパート級の４段階に分かれており、基礎級と応用級は、受検資格がないため誰でも受検することができる。スコア型ではなく、級ごとに合否判定が出るタイプの試験である。各級の概要をまとめると表11のようになる。

表11　医学英語検定試験の各級の概要

級	レベル	受検資格、試験内容
エキスパート級（1級）	医学英語教育を行える（プロフェッショナル級受験者を指導できる）レベル	・プロフェッショナル級合格者のみ受検可能 ・医学英語あるいは医学英語教育に関する業績の事前審査、面接
プロフェッショナル級（2級）	英語での論文執筆、学会発表、討論を行えるレベル	・応用級合格者のみ受検可能 ・筆記試験、プレゼンテーション
応用級（3級）	英語で医療に従事できるレベル（医療従事者、通訳、翻訳）	・誰でも受験可能 ・リーディング、リスニング
基礎級（4級）	基礎的な医学英語運用能力を有するレベル（医学部在学あるいは卒業程度）	・誰でも受験可能 ・リーディングのみ

（参考資料[17]、[18]）

医英検の出題内容は、医療現場で用いられる単語や文書、患者と医療従事者との会話等、医療業務に直結する内容であるため、教本（参考資料［18]）を学習するだけでも勉強になる。また、表11によると、医療系の学生が受検するのに適しているのは、「基礎級」であろう。これはリーディングに焦点をあてた試験であるが、前節の表８～10で見たように、医師や薬剤師は現場で特にリーディングの技能を求められることが多いということを考えると、この技能の強化にふさわしい試験である。リスニングも勉強したい場合は、応用級にも挑戦するか、あるいは次節で見る、もう一つの医療英語の試験も良いかもしれない。

なお、医英検公式ホームページ（参考資料［17]）によると、２～４級の合格証書には有効期限がない。１級は５年ごとの更新が必要である。

2.3. 国際医療英語認定試験

次に、国際医療英語認定試験（Certification for Bilingual Medical Staff、CBMS）について概観する。これは、日本医師会や日本医学会、日本病院会等の後援を受けながら、一般財団法人グローバルヘルスケア財団が2011年から毎年１回、実施している試験である。医英検と同様に、医療業務で求められる英語力が試される。これは合否型ではなくスコア型の試験であるため、比較的、受検のハードルは低いかもしれない。また、2020年にオンライン方式になってからは、Webカメラ付きのパソコンがあれば自宅からも受検できるようになった。

この試験の概要は、次の表12のようにまとめられる。レベルは、初歩的な内容の「Basic level」と、主に医療従事者等を対象とした中上級レベルの「Advanced level」とに分けられ、いずれも、リーディングとリスニングの力が試される。

表12　国際医療英語認定試験の各レベルの概要

レベル	満点	試験時間	試験内容
Basic level	400点	60分	リーディング、リスニング
Advanced level	800点	120分	リーディング、リスニング

（参考資料[21]）

Advanced level受検者の上位３％に入った場合は、メディカルイングリッシュコミュニケーターという資格も与えられる。

なお、公式ホームページ（参考資料［21］）によると、スコア認定書には５年という有効期限があるため、注意が必要である。

2.4. 医療英語の資格試験まとめ

以上、２節では、医療英語を学ぶのに適しており、かつ、誰にでも受検資格があり大学生が挑戦しやすい、医英検と国際医療英語認定試験につい

て概観した。[5] いずれの試験も、教本や問題集が市販されているため、独学で学習することができる。また、国際医療英語認定試験は、試験本番とは別に、模擬試験（オンライン）を受検することもできる。合否型かスコア型か、会場受検方式かオンライン方式か、といった違いも考慮しながら、好きな方を選ぶのが良いと思われる。

これらの試験対策として学習を行うことで、医療英語のリーディングやリスニング等の技術が向上することが期待できる。また、2.1節で見たように、医療職に就く以上は、英語を使用する場面を避けては通れず、英語学習の継続が必須であることを考えると、これらの試験は、英語学習を継続するための良いモチベーションとなってくれるであろう。そしてもちろん、取得した級やスコアは、英語で医療業務を行う能力の証明になるため、就職やキャリアアップの際に履歴書に書き、自分の強みにすることができる。

3．まとめ

本稿では、大学生の英語力向上に役立つものとして英語の資格試験に注目し、それぞれについて概観、考察した。英語を学習する目的は人それぞれであろう。総合的な英語力を習得したい、英語学習のモチベーションを維持したい、就職に役立てたい、という場合は英検やTOEIC、TOEFL、IELTS、ケンブリッジ英語検定などにぜひ挑戦してほしいし、留学希望であれば、特にTOEFLやIELTS、ケンブリッジ英語検定などを活用すると良いと考える。

---

[5] 医療系の英語資格試験としては、これらのほかに、医療通訳技能認定試験（一般財団法人 日本医療教育財団）や医療通訳技能検定試験（一般社団法人日本医療通訳協会）等もあるが、受検資格として通訳の実務経験等の高い専門性が求められる等、大学生にとってはあまり現実的でないため、本稿では扱わない。

そして特に医薬系学部の学生については、もちろん、上記の資格試験を活用しながら英語力を維持していくのが望ましいが、将来、医療業務や研究で英語力を発揮したいのであれば、実践的な内容で医療英語の語彙も豊富に身につく医英検や国際医療英語認定試験にも挑戦してみる価値があると考える。

＜参考資料＞

［１］文部科学省資料（2018）「各資格・検定試験と CEFR との対照表」
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/091/gijiroku/__icsFiles/afieldfile/2018/07/27/1407616_003.pdf

［２］英検受検者数の推移　https://www.eiken.or.jp/eiken/about/situation/

［３］英検公式ホームページ https://www.eiken.or.jp/eiken/

［４］TOEIC 受検者数
https://www.iibc-global.org/toeic/official_data/test_takers.html

［５］TOEIC と CEFR との相関関係
https://www.iibc-global.org/toeic/official_data/toeic_cefr.html

［６］「TOEIC Program DATA&ANALYSIS 2023」
https://www.iibc-global.org/hubfs/library/default/toeic/official_data/pdf/DAA.pdf

［７］新入社員に期待する TOEIC L&R スコア
https://www.iibc-global.org/toeic/corpo/case/com/rookie.html

［８］「TOEFL iBT Test and Score Data Summary 2022」
https://www.ets.org/pdfs/toefl/toefl-ibt-test-score-data-summary-2022.pdf

［９］TOEFL スコアと CEFR との相関関係
https://www.ets.org/toefl/score-users/ibt/compare-scores.html#accordion-1e9bee5a64-item-26098d20a4

［10］留学に必要な TOEFL スコア
https://www.toefl-bt.jp/dcms_media/other/2023TOEFL%20iBT%20Acceptance%20Map%20usa.pdf

［11］アイエルツ日本版受検者向け情報（2020）
https://www.eiken.or.jp/ielts/test/pdf/information_for_candidates_jp.pdf

［12］ブリティッシュ・カウンシル（2015）「IELTSブリティッシュ・カウンシル公認問題集」、旺文社
［13］日本ケンブリッジ英語検定機構公式ホームページ
https://www.cambridgefoundation.jp/
［14］ケンブリッジ英語検定を認定している機関
https://www.cambridgeenglish.org/jp/why-cambridge-english/global-recognition/
［15］三好暢博、内藤永、高橋美佳、吉田翠（2009）「職種間比較による医療従事者の英語使用実態及び英語基礎力に関する調査」『一般英語と実務・専門英語の乖離是正のための基礎研究』
［16］大野拓恵、加藤隆治、板倉宏予、柳本ひとみ、梅田純代、サムソノー・グレゴリー、山田恵、黒澤菜穂子（2019）「薬剤師の英語使用の実態と必要性の認識および学部時代の教育への評価に関する調査研究―病院と薬局薬剤師の比較」、『薬学教育』第３巻、日本薬学教育学会　https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjphe/3/0/3_2018-035/_pdf/-char/ja
［17］日本医学英語検定試験公式ホームページ　https://jasmee.jp/epemp/
［18］日本医学英語教育学会編（2023）「日本医学英語検定試験基礎級（４級）・応用級（３級）問題選集・教本　第４版」、メジカルビュー社
［19］グローバルヘルス財団CBMSプロジェクト（2021）「Enjoy Training－国際医療英語認定試験への挑戦－　Basic Level」、CBMS出版
［20］グローバルヘルス財団CBMSプロジェクト（2021）「Enjoy Training－国際医療英語認定試験への挑戦－　Advanced Level」、CBMS出版
［21］国際医療英語認定試験公式ホームページ　https://www.cbms.jp/
［22］東京都医師会公式ホームページ　https://www.tokyo.med.or.jp/30978